



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 江戸時代のアイヌ語彙集「狄さへつり」について  |
| Author(s)        | 佐藤, 知己  |
| Citation         | 北方人文研究, 10, 119-128   |
| Issue Date       | 2017-03-10  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/65822">http://hdl.handle.net/2115/65822</a> |
| Type             | bulletin (article)  |
| File Information | 10_09_sato.pdf  |



[Instructions for use](#)

# 江戸時代のアイヌ語彙集「<sup>えぞ</sup>狄さへつり」について

佐藤知己  
(北海道大学)

## 1 はじめに

アイヌ語の古記録は数多くあるが、その多くは18世紀後半以降に成立したものであり、それ以前に属するものはそれほど多くは見いだされていない。最古層に属するとされる「松前ノ言」(天理大学附属天理図書館蔵)にしても明確な成立年は不明であり、「松前ノ言」が示している諸特徴が古いアイヌ語文献の特徴と言えるのかどうかについて、誤写の可能性も含めてこれまで疑点がないわけではなかった。しかし、近年、跋文に宝永元〔1704〕年の年号を有する「<sup>えぞ</sup>狄言葉」というアイヌ語資料が発見され、この資料と比較することによってアイヌ語の古記録の整理、研究が進められるようになったことは喜ばしいことである。これまでは「松前ノ言」にしか見られなかった語彙や表記上の特徴が「<sup>えぞ</sup>狄言葉」にも見られることから、古い時代のアイヌ語の特徴が少しずつではあるが明らかにされつつある(佐藤2014)。以下では、これまでに得られている知見に基づいて、成立年代は不明だが、やはり古い層に属すると思われる「<sup>えぞ</sup>狄さへつり」という注目すべきアイヌ語資料について、文献的、言語的な考察を行うことにする。なお、この種の資料としては分量が大きいので、表記、内容の詳細な分析は今後の課題としたい。本稿はこの資料の本格的な研究のための予備的な報告である。

## 2 書誌的解説

「<sup>えぞ</sup>狄さへつり」は、近年まで岩手県盛岡市の「盛岡市中央公民館」に所蔵されていたが、現在は同市の「もりおか歴史文化館」に移管されている。縦18cm、横26cmの横本の写本で、全部で49丁ある。表紙、裏表紙は濃緑色で、表面に菱形の渦巻き模様が型押しされている。年代や筆者名は記されていない。表紙の左側に「<sup>えぞ</sup>狄さへつり」と縦書されている。旧藩主である南部家の旧蔵書の一部が盛岡市中央公民館に所蔵されていたが、本書はその中の一冊である。なお、これまでのところ、この南部家旧蔵書の中には、本書以外にアイヌ語に関するような文書は見いだされていない。本書の年代、成立の推定には、他の所蔵機関の調査も視野に入れた、南部家旧蔵書全体の調査が今後必要であろう。

1丁表から裏までは目次であり、目次によれば語彙は以下のように意味によって分類されている。

- 一 天地之部
- 一 色味之部
- 一 年月昼夜之部
- 一 五臓之部

- 一 人間之部
- 一 親類之部
- 一 武道具之部
- 一 五穀之部
- 一 作事並家財之部
- 一 料理之部
- 一 魚鳥之部
- 一 畜類之部
- 一 衣類之部
- 一 國土草木海川之部
- 一 船之部
- 一 商賣之部
- 一 言語之部

2丁表から語彙部になるが、頭に記された内題は単に「さえ徒里」であり、表紙に記された外題の「狄さへつり」とは表記、表現が若干異なっている。ここでは仮に表紙の「狄さへつり」を書名として用いることにする。なお、『広辞苑』には、「さえずり」の意味の一つとして、「地方の人や外国人などの聞きわけにくい言葉」を挙げ、敏達紀「韓語からさえずり」、源氏物語松風「海人あまのさえずり思し出でらる」という例を挙げているが、本書の「さえ徒里」もこのような「異言語」を意味するものとして用いられているのであろう。古語、あるいは雅語と思われる表現が本書の表題に用いられているのはなぜかは、本書の成立年代や筆者の推定の上からも興味ある問題である。今後の課題であるが、このような表題を持つ文書が他にないかどうか、もしあるとしたらどのような時代のものであるかを調査する必要がある。なお、「もりおか歴史文化館」には、旧所蔵機関の盛岡市中央公民館から引き継いだ南部家旧蔵書の各種目録も所蔵されているが、それらを調査しても今のところ、本書に該当する書籍を確認することができていない。すくなくとも、江戸時代、明治初期の蔵書目録には記載がないようである。今後も調査を継続する必要があるが、本書が南部家旧蔵書に加えられたのはそれ以後である可能性もあり、そうだとすると本書の来歴は他の南部家旧蔵書と異なることになり、本書の資料的な位置づけをより確かにするためにも、所蔵経緯についてなお一層の調査が必要である。

内題の「さえ徒里」の後に語彙が縦書きで記されている。「一 志祢婦 壺ツ」のようにまずアイヌ語が見出し語として挙げられ、その後に日本語の意味が記されている。なお、見出しの多くは語であるが、中には「一 糸屋に連糸祢こな祢や 御身名ハ何と言ぞやト言事」のように文（または句）が書かれている場合もいくつかある。総見出し数は、899であり、既に述べたように比較的分量が大きい点が注目される。

明白な訂正箇所は気づいた範囲では一個所のみである（「一 ~~あん祢~~ 急ケと言事」）。このことは、この本が十分な用意のもとに、注意深く書かれたものであることを示唆しており、私的なものというよりは、多くの人の目にふれる、公的な性質を帯びたものとして作成されたのではないかと推察される。

### 3 表記と音声的特色

アイヌ語の表記には様々な仮名（変体仮名）が用いられている。例えば、「あ」は「阿」、「る」は「類」、「累」、「流」と書かれることがあり、「く」は「具」、「へ」は「遍」、「つ」は「川」、「徒」と書かれることもある、という状況である。その結果、次のように同じ形式が異なる仮名で表記されている例がある。

阿しき衾つふ（五ツ *asiknep* 「五」）

あしき衾つふい可し満王んへ（十五 *asiknep ikasma wanpe* 「十五」）

比較的新しい年代に属する資料にもこのような変体仮名による、同一形式の複数表記の例がないわけではないと思われるが、アイヌ語の表記にカタカナではなく、主として多様な変体仮名を用いているという点は、最古のアイヌ語文献の一つとされる「松前ノ言」（1624-1644?）、年代が明記された日本における最古のアイヌ語文献である「狄言葉」（1704）とも共通する特徴であり、本書がこれらの先行文献と同じ古い層に属するものであることを推測させる特徴の一つと言える。

詳細な検討は今後の課題であるが、現代のアイヌ語の音韻と仮名表記の対応の概略は以下のようなものである<sup>1</sup>。

*p* に対応する表記の例（変体仮名は代表的なものだけを見出しに挙げている。以下同様）：

「婦」：

志衾婦（壹ツ） *sinep* 「一」

「つふ」：

徒つふ（弐ツ） *tup* 「二」

*t* に対応する表記の例：

「つ」：

徒本つ（四拾） *tu hot* 「四十」

うれ遍川（指ノ事） *urepet* 「足指」

く川（帯ノ事） *kut* 「帯」

「つゝ」：

ほつゝ（廿） *hot* 「二十」

具川ゝ（帯ノ事） *kut* 「帯」

「つ婦」：

あつ婦（物ノ緒） *at* 「紐」

<sup>1</sup> 特に断らない限り現代のアイヌ語の事例は千歳方言話者白沢ナベ氏から筆者がご教示いただいた例である。ここに記して感謝申し上げる。なお、文献から語形を引用する場合、原則、アクセント記号や喉音素記号 / ' / を便宜上省略する。

対応する仮名がない場合：

あしけ遍（指ノ事） *askepet* 「指」（*t*に対応する仮名無し）

*k*に対応する表記の例：

「具」：

せ、具（同あつき事） *sése*k 「暑い」

ほくゆ具（熊ノ事） *hokuyuk* 「雄熊」（知里 1962 [1976] : 153）

ゆく（鹿ノ事） *yuk* 「シカ」

「つふ」：

本くゆつふ（熊ノ事） *hokuyuk* 「雄熊」（知里 1962 [1976] : 153）

ゆ川婦（鹿ノ事） *yuk* 「シカ」

「つ」：

あべけせゑつて（火を取てこへと言事） *apekes* 「薪の燃え尻」、*ekte* 「来させる」

対応する仮名がない場合：

て多ゑい（此方へ古へと言事） *téta* 「ここに」、*ek* 「来い」

以上からわかるように、音節末の *p*、*t*、*k* に対応する仮名は、複数の表記法が混在しており、極端な場合は、*yuk* 「シカ」という同一の形式に対して「ゆく」、「ゆ川婦」のように異なる表記が用いられている事例もある。このような特徴をどう評価するかは今後の課題であるが、日本語とは異なる音韻構造を持つアイヌ語の形式を仮名で表記する上でのある種の試行錯誤があったことを思わせるものである。アイヌ語の記録がまだそれほど一般化していない段階の資料ではないか、ということである。

音節末の *r* に対応する表記

「流」：

者、いか流（春） *paykar* 「春」

もこ流（寝ル事） *mokor* 「眠る」

こ流（持事） *kor* 「持つ」

「り」：

志りひ累可（能天気ノ事） *sirpirka* 「天気が良い」

「里」：

う、ら里（霞ノ事） *úrar* 「霧」

ゑ飛りけ（小刀ノ事） *epirkep*（名寄方言）（服部 1964: 120）

「累」：

い累くる（兄弟ノ事） *irkur* 「一族」（金成 1959: 238）

ゑひ累希川（小刀ノ事） *epirkep*（名寄方言）（服部 1964: 120）

ひ累希川ふ（白米ノ事） *pirkep* 「粟」（久保寺 1992: 293）

ひ累可（能ト言事） *pirka* 「良い」

「ろ」:

ころかいき（それニ而もと言事） *an korkaiki* 「あるけれど」（久保寺 1992: 23）

音節末の *r* の表記は、概略的に言って「狄言葉」（1704）によく似た特徴を示していると言える。すなわち、*pirka* 「良い」の *r* には「る」に相当する変体仮名が一貫して用いられている。これは *epirkep* 「小刀」の *r* の表記が「ゑ飛りけ」、「ゑひ累希川」のように「る」と「り」の間で「ゆれ」を示しているのと対照的である。また、*sirpirka* 「天气が良い」が「志りひ累可」と書かれていて、*sir* の *r* は「り」、*pirka* の *r* は「る」（累）と書かれている点も「狄言葉」に共通している（佐藤 2014: 38）。このことは「狄さへつり」が「狄言葉」（1704）と同様、古い層に属する資料であることを示唆するものと言える。

*ce* に対応する表記の例:

「せ」

せ川婦（魚之事） *cep* 「魚」

この表記は「狄言葉」（1704）と同様である。「狄言葉」には「肴ト言事ハ せ川婦」とある（佐藤 2014: 7）。

*tu* に対応する表記の例:

「川」:

ゑ川（鼻） *etu* 「鼻」

「と」:

ゑとふ（鼻） *etuhu* 「～の鼻」

*tu* に対応する表記も「狄言葉」（1704）と同様である<sup>2</sup>。ただ、「狄さへつり」では「鼻」という同一の形式の *tu* に対して「川」と「と」という二様の表記が当てられている点に注意される。

長母音的表記:

婦うれ（赤キ） *húre* 「赤い」

志い志やも（能キ人ノ事） *sísam* 「日本人」

者あ本（母） *hápo|* 「父」（千歳方言。他の方言では通常は「母」の意。）

徒うき（さ可つきノ事） *túki* 「杯」

ゑい連（喰事） *ére* 「食べさせる」

ううせ（湯ノ事） *úsey* 「湯」

ミいな（笑事） *mína* 「笑う」

徒んなし（早キ事） *túnas* 「早い」

<sup>2</sup> 「鼻を ゑ川婦」（*etuhu* 「～の鼻」）、「何ニ而も出ルといふ事ハ へとく」（*hetuku* 「出る」）（佐藤 2014: 11）

てい連（待事）*tére*「待つ」  
 てい多阿婦ん（是へ参と言事）*téta*「ここに」  
 せいゝ具（暑キ事）*sése*「暑い」  
 けいらいひ累可（味このむ事）*kéra pirka*「味が良い」

上のように、本書にはある種の「長さ」を表記したのではないと思われる表記がみられる。また、これらの形式のほとんどが、現代のアイヌ語の形式においては開音節の第一音節に例外的にアクセントを有するものである点が注目される。さらに言えば、これほど規則的に対応を示す資料はひよっとすると他に例をみない可能性もあるほどである。もっとも、中には、うせ（湯ノ事）*úsey*「湯」、連ら（風ノ事）*réra*「風」、て多ゑい（此方へ古へと言事）*téta*「ここに」、*ek*「来る」、てたあ本ん（近寄レト言事）*téta*「ここに」、*ahun*「入る」のように、「長い」表記が現れない例もあり、問題を残している。

#### 濁点の使用：

たんば（當年ノ事）*tanpa*「今年」  
 とうかぶ（昼）*tókap*「昼」  
 志りべけ連（夜ノ明ル事）*sirpeker*「夜が明ける」

詳細は今後のさらなる分析が必要であるが、本書で濁点が用いられているのは八行の仮名にはほぼ限られていると言って良いようである。このことは、この濁点が有声音を表示しているというよりはむしろ、*p*を表記するためのものであることを示唆している。

#### 現代語形との注目される「ずれ」：

本書には、現代のアイヌ語の形式と明らかに関係付けられると思われるが、微妙に表記に「ずれ」がある事例が散見される。それらには以下のようなものがある。

ちゑ路しけ（作事ノ事）*cise*「家」、*roski*「立てる」  
 本ゝ婦に（起ル）*hopuni*「起きる」  
 のと者つけ（人の身ノ事）*netopake*「～の体」  
 志ゆらんへ（能キ着物ノ事）*saranpe*「上等の布」

「ちゑ路しけ（作事ノ事）」は形や日本語の意味から考えて *cise roski*「家を立てる」という現代の形式に対応するものであろうが、「ちゑ」と表記された原因はなんであろうか。「ちせ（家）」とはっきり記された例もあるので、単なる誤写である可能性もあるが、「ちゑ（家）」と表記された例が他にもう一例あるので、そうとも言い切れない。あるいは、「ちゑ」と表記されるのが妥当であるような、*cise*とは異なる「家」を意味する形式がかつてはあった可能性もある。この問題に関しては「せこ路く（てい衆ノ事）」という例も参考になる。この例はおそらく、*cise kor kur*「家の主人」に対応するものであろうが、*cise*「家」に当たる部分は「せ」と表記されている。具体的な形に関しては即断はできないが、これらは、アイヌ語（のいずれかの方言）にはかつて *cise*「家」の弱まり語形として、\**ce*ないしは \**se*という形式があったことを示すものかもしれない。

「本ゝ婦に（起ル）」は現代の *hopuni*「起きる」に対応するものであるが、*ho*に「本ゝ」が対応している。「ぼん（小成事）」(*pon*「小さい」)という例があるので、「本ゝ」は *po*に対応

するとみられるが、現代の形式は *hopuni* であって、\**popuni* という形式はないようである。「ほに（腹）」(*honi* 「～の腹」) という例もあるので、「ほ婦に」と表記してもよかつたはずであるが、「本婦に」と表記されているのはなぜであろうか。単なる誤写の可能性もあるが、類似の表記は他の文献にも現れる点が注意される。「蝦夷記」(1795) という文献には、「ポブニ ヲキロト云事」、「ポブンバ 立ト云事」のような例がみられ、それぞれ、*hopuni* 「起きる（単数形）」、*hopunpa* 「起きる（複数形）」に対応する（佐藤 2003: 103）。現代とは異なる音声的特徴に対応する表記である可能性もあり、今後の検討課題としたい。

「のと者つけ（人の身ノ事）」、「志ゆらんへ（能キ着物ノ事）」については、それぞれ、*netopake* 「体」、*saranpe* 「上等の布」のような形式が対応すると思われるが、*ne* に「の」、*sa* に「志ゆ」が対応しているように見える。誤写か、聞き取りの不備か、あるいは方言的変異であるのか、これだけの例ではなんとも言えない。佐藤（2003: 104）には、「ボラカラ *parkar*（辛い）」のように、やはり母音表記にずれがある例が集められているが、多くは *a* にオ段の仮名表記が対応している事例であり、本書における現象とはやや性格が異なるようである。ちなみに、「志ゆらんへ（能キ着物ノ事）」には、「さらん遍」という表記例も見られる。少なくとも、*/s/* に対応する発音として、*[j]* と *[s]* の二つがあったことを示すものと考えられる。同様な例としては次のような例もある。「きさら（耳）*kisara* 「～の耳」」、「き志やら（耳）*kisara* 「～の耳」。

#### 4 文法的特色

あまり例は多くないが、人称表示要素の例がみられる。

くれ具ち（首ノ事）*ku-rekuci* 「私の首」

ゑん古れ（被下と言事）*en-kore* 「私にくれ」

く王ほ（母）*ku-* 「私の」、*hápo* 「父」（千歳方言。他の方言では通常は「母」の意。）

く王んべ（父）*ku-* 「私の」、*hanpe* 「父」（旭川方言）（服部 1964: 39）

ひ累可の徒やしか流者うんこれ（能言葉懸てくれよと言事）*pirkano* 「よく」、

*tuyashkar* 「可哀想に思う」（久保寺 1992: 286）、*wa* 「て」、*un-kore* 「私達にくれ」

これらのうち、親族名詞に付く *ku-* はやや特殊な用法である可能性がある。*ku-hapo* 「私の母」、*ku-hanpe* 「私の父」という形式は現代ではどの方言でも普通に見られる形式ではないと思われる（*ku-kor hapo*、*ku-kor hanpe* という形式がより一般的である可能性）。

その他、現代の形ではうまく説明できない形式の例としては、次のようなものもある。

者よくべ（具足ノ事）*hayokpe* 「鎧」

はよ川婦（具足ノ事）*hayokpe* 「鎧」

いずれも *hayokpe* 「鎧」という意味の形式であるが、末尾が「婦」で表記されている例がある点が注目される。佐藤（2008: 175）は、「松前ノ言」の数詞の研究から、現代のアイヌ語形の *pe* 「もの」という異形態は、\**p* → \**pə* → *pe* のような変遷を経ているのではないかと推論した。その後、「松前ノ言」以外の資料に類例を発見することができていなかったが、上の例はこの推論を補強するものと言えるかもしれない。すなわち、*hayok* 「変装する」のような動詞に \**p* 「もの」が接合した \**hayokp* のような形式、あるいは末尾に寄生的な母音 *ə* が添加された \**hayokpə* のような段階を示すものかもしれない。



## 5 語彙的特色

以下のように異なる方言の語彙を示したと考えられる例がある。

志やば (頭ノ事) *sapa* 「頭」

者<sup>ゝ</sup> け (頭ノ事) *pake* 「頭」 (帯広方言) (服部 1964: 2)

者<sup>ゝ</sup> 路ふ (口) *paroho* 「~の口」

た累ふ (口) *caro* (帯広方言) 「~の口」 (服部 1964: 6)

なお、*ca* に「た」が対応する類例が他にないため「た累ふ」という表記についてはなお考察が必要である。誤写の可能性もあるが、今日知られている音とは違う音であったことを示すものである可能性もある。今後も「た」と *ca* が対応する事例に留意する必要があるであろう。

あいの (狄之事) *aynu* 「人間」

おつかい (男 童ヲ言) *okkay* 「男」 (帯広方言) (服部 1964: 34)

上の例の「あいの (狄之事)」という例は注目に値する。なぜなら、この語の初出年代は比較的新しく、管見によれば「狄島夜話記」(1734) (東北大学附属図書館蔵) がこれまでのところ最古の例である (佐藤 2009: 57)。これだけからすれば、本書の成立年代は少なくとも18世紀以降、ということになるかもしれない。他方、「おつかい (男 童ヲ言)」は、*okkay* 「男」に相当するが、意味が「少年、子供」である点が現代とは異なる。佐藤 (2003: 109) が指摘しているように、「津軽一統志」(1731年刊、1669年のシャクシャインの蜂起に関する文書を含む)、ジロラモ・デ・アンジェリスの「蝦夷国報告書」(1625) のような古い層に属すると思われるアイヌ語資料ではいずれも *okkay* に相当する形式の意味を「少年、若い男」のように説明しており、この例は本書が古い資料と共通の特徴を持っていることを示すものと言える。なおこの点に関連して注目されるのは、本書に「と者り (志のひノ事)」という例が含まれていることである。北海道 (編) (1969: 149) によれば、これは「津軽一統志」に記載されているアイヌ語の記録「一 とはり しのびの事」と完全に一致する。「津軽一統志」にはわずかししかアイヌ語の記載がないため、検証は困難であるが、この例は本書が「津軽一統志」の編纂に用いられた資料と関連を持つ可能性を示唆するものかもしれない。ちなみに、「と者り」に相当する可能性のあるアイヌ語としては、*topattumi* 「夜襲」という語に含まれている *topat* という形式が挙げられる。*tumi* は「戦争、軍隊」という意味であるが、*topat* の意味は今日、わからなくなっている。ただし、末尾の *t* は、*t* の前で *r* が *t* に交替したものである可能性があり、もしそうだとすると、\**topar* 「忍び寄る」という形式がかつては存在した可能性がある。これが「と者り」と記録されたのではないだろうか。

以下の例も、他の文献との関係において注目される例である。

於累たら (悪敷言事 母ト言事)

おなば (同断 父ト言事)

うなたら (散、成事)

さんたけ (ひだるき事)

とくいらんかふふて (近付キ久敷と言事) *tokuy* 「友達」 (沙流方言) (服部 1964: 48)、

*irankarapte* (久しぶりに会った時の挨拶)

いらぬ可ら（久敷有テと言事） *irankarapte*（久しぶりに会った時の挨拶）

な可らてい（久敷有テと言事） *inankarapte*「こんにちわ」（帯広方言）（服部 1964: 335）

まず、「於累たら（悪敷言事 母ト言事）」、「おなば（同断 父ト言事）」、「うなたら（散、成事）」という例についてである。「父」と「母」で意味が入れ違っている点、表記が多少異なる点は問題であるが、これは「狄言葉」（1704）に「おな多ら（父殺）」、「おなバ者（母殺）」とあるものとおそらく同じものであろう。佐藤（2014: 41）はこの形式を一種の「軽蔑語」ではないかと推測したが、現代の形式に今のところ対応するものを見いだせていないのでなお考察が必要である。しかし、共通の語彙を採録している点からみて、少なくともこの事例は、本書の成立年代が「狄言葉」（1704）と近いことを推測させるものと言える。また、「さんたけ（ひだるき事）」も現代のアイヌ語資料に相当する形式を発見できていないが、やはり「狄言葉」（1704）に「者らさん多<sup>ゝ</sup>ひけ連（飛多<sup>ゝ</sup>るい）」とあるものと同じ形式を含んでいるとみて良いであろう。この事例も本書が「狄言葉」（1704）と共通する性格を持っていることを示すものである。さらに、「久しぶりに会った時のあいさつ」として、*irankarapte*に相当すると思われる表現が見られるが、注目されるのは「な可らてい（久敷有テと言事）」という例である。この例は、日本側のアイヌ語最古の記録とされる「松前ノ言」に「な可れてい 久しき」、また、年号が明記されている最古の文献である「狄言葉」（1704）にやはり「な可らてい（久敷）」として記録されているものと同一であることは明らかであろう。佐藤（2014: 42）はこの事例を服部（1964）の *inankarapte*（帯広方言）に比定したが、その当否はともかく、「松前ノ言」と「狄言葉」という古い層に属する資料と本書が共通の特徴を持っていることを示す特徴の一つと言えるであろう。

## 6 おわりに

以上、ごく概略的にはあるが、「狄さへつり」というアイヌ語資料について、表記、内容の点から、それがこれまで知られている古い層に属するアイヌ語資料と共通の特徴を持つ、重要な資料であることを指摘した。

## 謝辞

本稿は科学研究費（基盤研究C「古記録によるアイヌ語の歴史的研究」（24520448）、研究代表者佐藤知己（北海道大学大学院文学研究科））による研究成果の一部である。

本書の存在は北海道博物館の小川正人氏から初めて教えられた。ご教示に感謝申し上げます。氏は盛岡市中央公民館で行われた同館の貴重書特別展示の目録中に本書の書名があることに目を留められ、筆者に教えて下さったのであるが、その眼力の鋭さには敬服せざるを得ない。折悪しく「もりおか歴史文化館」への移管と重なり、しばらくはマイクロフィルムでしか研究ができず、その後、同館のご厚意でようやく直接研究することができた時のうれしさは何とも言えないものであった。関係の方々に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 知里真志保（1962 [1976]）『分類アイヌ語辞典第二巻動物篇』、日本常民文化研究所彙報第87。日本常民文化研究所。（『知里真志保著作集別巻Ⅰ』東京：平凡社、所収）
- 服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。
- 北海道（編）（1969）『新北海道史』、第7巻史料1。札幌：北海道庁。

- 金成マツ (1954) 『金成マツ ユーカラ集 5』 東京: 三省堂.
- 久保寺逸彦 (1992) 『久保寺逸彦アイヌ語・日本語辞典稿』 札幌: 北海道教育委員会.
- 佐藤知己 (2003) 「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」『北海道大学文学研究科紀要』 111: 95–118.
- 佐藤知己 (2004) 『古文献によるアイヌ語諸方言の比較研究』 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語古文献における言語学的諸問題』『北海道大学文学研究科紀要』 124: 153–80.
- 佐藤知己 (2009a) 「18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」『北海道大学文学研究科紀要』 127: 29–58.
- 佐藤知己 (2009b) 『古文献によるアイヌ語史の構築』 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- 佐藤知己 (2014) 「宝永元 [1704] 年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の言語学的考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 20: 1–133.
- 佐藤知己 (2016) 『「狄言葉」の研究』 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.

## Remarks on “*Ezosaezuri*”, an Edo-era Ainu-Japanese vocabulary

Tomomi SATO

(Hokkaido University)

Ainu linguistic materials which can be definitively dated back to before the early eighteenth century are highly limited. Currently, we have only two sizeable collections from this period: “*Matsumae no kotoba* [The language of Matsumae]” (c. 1624–1644) and “*Ezokotoba* [The language of the Ainu]” (1704). This lack of materials has long prevented us from studying the history of the Ainu language in much detail. However, recently we have found an old Ainu vocabulary titled “*Ezosaezuri* [Jargon of the Ainu]” in the possession of Morioka Rekishi Bunkakan [Morioka History and Culture Museum], Iwate Prefecture. This work is worthy of note in that it exhibits a number of characteristics also seen in “*Matsumae no kotoba*” and “*Ezokotoba*”. It can be expected that further study of this vocabulary will enable us to investigate important historical characteristics of the Ainu language.

1. Introduction
  2. Bibliographical description
  3. Transcription and phonetic characteristics
  4. Grammatical characteristics
  5. Lexical characteristics
  6. Conclusion
- References